

〔講演要旨〕 明治三陸津波 (1896) による綾里・白浜での津波駆け上がり地点を巡る

誤解と誤報を正す

山下文男 (大船渡市)

(はじめに) 大船渡市・綾里白浜地区に於ける明治三陸津波の駆け上がり地点を巡り、一部の全国紙や津波防災著書が、事実誤認に基づく報道を行ったために、全く、見間違いのことが HP などでも流布され、混乱を招いていることが判明したので正しておきたい。

(事実関係) 綾里湾奥の白浜海岸から駆け上がった 38.2m (土木試験場内務技師・松尾春男の測量) の津波が、南隣の綾里「港湾」から駆け上がって来た津波と連絡した地点については、昨 2006 年度の歴史地震研究会第 23 回大会(大船渡大会)に於ける巡見の際にも、参加者一同で訪れ、そこに建つ「明治三陸大津波記念碑」を見学した他、白浜海岸の岸边に実際に立って、津波が駆け上がった伝説の岬方向を展望している。

(誤解と誤報) ところが、全く心外にも「山下文男」の話し、あるいは説明として、次のような記事が、新聞に掲載され、全国的に流布されていることを知った。

「北側の越喜来湾と綾里湾に押し寄せた津波が岬でぶつかり、さらに波が高くなった。両湾とも漁村は全滅した」
(2004・6・3 『毎日新聞』「備える大地震」)

会員各位が巡見の際に実際に訪れたように、両湾の津波がぶつかった、即ち『綾里村詩』に書いてあるところの「海水連絡せる」場所というのは、南隣にある U 字形の小さな湾である、通称「港湾」との間にある小高い岬(「道合」または「水合」)であって、「北側の越喜来湾」と結ぶ岬ではない。実際にも越喜来湾に到る北側の岬は、標高 272m 近くにあつて、38.2m の津波が超えられるはずもない。

然るに、ほぼ同様の記事が、この後、『朝日新聞』岩手版「岩手見聞録」(2006・6・1)にも「津波の語り部・山下文男が語った」こととして掲載されている。

「この岬で、綾里湾と北側の越喜来湾に押し寄せた津波がぶつかって波が高くなり、漁村は全滅した」。

津波がぶつかったとか、漁村が全滅したとか、文章表現まで、前の記事と似通っているが、この記事などは、その上 asahi.com で全国的に流されていることを最近になって知った。『朝日新聞』に、事の次第を訊いて訂正方を申し入れたところ、誠実に対応してくれ、早速 asahi.com の記事を削除したとのことであった。

両紙の記者とも、私の案内で取材して帰ったのだが、私は、そんなことを話した覚えは全くないし、そもそも、一応、地元のことを熟知し、そのことについての『津波伝承碑』の碑文や解説文まで執筆している私が、北側の越喜来湾と岬で合流したなどという見間違いのことを言うはずがなく、全くの誤解・誤報である。

綾里湾の南隣に当たる「港湾」というのは地図に湾名の

記載がなく、地図に記載されている隣の湾と言え、北側の越喜来湾だけなので、地図を見て、ああ、これか? と早とちりで書いてしまったものと思われる。記者の取材不足と言えよう。

なお、これらの記事と関係があるのかわかりませんが、山下の名前が出てくる訳でもないが「監修日本地震学会会長大竹政和」による『防災力! 宮城県沖地震に備える』(創童社)という著書の中にも「明治三陸地震津波」に関して、つぎのような無署名の解説記事が掲載されている。「綾里湾と隣り合う越喜来湾に同時に侵入した津波は岸边を飲み込んで大きく膨れ上がって岬で合流してさらに波高が盛り上がりました。その最高地点海拔 38.2 メートルは湾奥深い山中の岬道の電柱に表示されています」。

綾里湾の北側には越喜来湾というのがあって隣り合っていることは事実だが、綾里湾の津波が合流したのは、前記のように、その越喜来湾からの津波ではないし、38.2 表示がある電柱の立っているのも、越喜来湾の方向ではなく、ともに南側にある「港湾」の方向である。この著書には、他にも明治三陸津波の死者数を 2 万 6000 余とする誤りなどもあるので、監修者・大竹教授の見落としだろうと思ってお知らせしたところ、早速返事があつて、指摘の点、重版の機会にでも修正すると言ってきた。大竹教授をはじめ、この本の執筆者として名を連ねている東北大学の今村文彦教授や長谷川昭教授らの執筆したものとは思えないが、いずれにしても、この種の本で無署名の解説文というのは、出版社として無責任を誹りを免れない。

(むすび) 二つの新聞記事や著作の解説文については、はじめは私も、困った記事だと思ったが、たいした問題視していなかった。しかし、それが、単に新聞や著書に掲載されているだけでなく asahi.com で、全国的に流され、ある映画会社が製作中の津波防災ビデオのナレーションでも、山下の語ったこととして採用されようとしていることを、そのプロデューサーが持って来た原稿資料で知るに至ったからである。しかも asahi.com は、記事を削除したが、同様の誤報が、ほかにも出回っているらしいという。こういうことは、一度、活字化してしまうと、その影響を取り除くことがたいへん困難であることを、私は、これまで何度か経験したり、見たいしている。したがって、このまま黙視していると誤った記述が、一部ではあつても、事実として定着しかねないという危惧もある。この点を会員の方々にもご理解頂いて、このような誤解に基づく誤報を正すことに協力して下さるよう切望するものである。

(編者注: 原文「アサヒコム」は asahi.com と変更)